

中村 絃子

HIROKO NAKAMURA

スペシャルインタビュー

デビュー55周年を迎え、

ますます円熟を深めるピアノ界の女王。

1982年開館直後のザ・シンフォニーホールに初登場して以来、

共に歩みを刻んできたといっても過言ではない

中村絃子さんに直撃インタビューを敢行!

日本のクラシック音楽界を牽引し続け、

今なお不滅の輝きを放ち続けている

その魅力についてたっぷり語って頂いた。



© Hiroshi Takaoka



1983年5月29日ザ・シンフォニーホール初リサイタル

——このほかに、魅力的な作品が並んだプログラムになりました。

ショパンは、子供のときから馴染んだ曲も入っていますし、リストの「ウィーンの夜会」は、私が10歳の時に勉強した曲なんです。当時レオニード・コハンスキ先生に師事していて、戦後、武蔵野音大に招聘されて日本へ来られた方なのですが、これがまったく、それまでの日本のピアノのレッスンと違ったわけです。例えば、「ウィーンの夜会」はワルツなんですけど、「ワルツってこうやって踊るんだよ」なんて、私のまだちっちゃい手をもって、踊ってくださいって。そんなことレッスンで無かったですから、私にとっては、もう、本当にびっくりするような経験！楽譜には何にもそういう指示は書いてないんですが、先生は、ワルツの中に「ここはね、素敵な王子様とお姫様が、ダンスしていてお互いにフツとお辞儀をしあうところだから、ちよつとそこは待ちな

1月18日「デビュー55周年記念リサイタル」について

——1983年にザ・シンフォニーホールで初リサイタルを開かれて、その時の最初の曲が、今回も演奏頂くベートーヴェン「テンペスト」でした。

この「テンペスト」は、非常に惹かれる音楽で、ベートーヴェンのソナタの第1番から第32番まで、古典的な様式のものから一つ一つ壊して次のものを作り上げる凄いエネルギーとアイディアが、どの曲にもあるんですけど、「テンペスト」のあたりで、もの凄くロマン派の境地に入っていく訳ですよ

——デビュー55周年、本当におめでとうございます。半世紀を超えたピアノ人生を振り返られて、どのような思いがござい

ますか？

近頃は1年経つのも早いような感じがいたしますので、あつという間の55年だったような気がしますけど、振り返って考えれば、なんと私は幸運だったかと。世の中で長い間、第一線で仕事をするっていうのには、もちろん努力もいるし才能もいるけど、やっぱり幸運が必要なんですね。戦後、日本が無から立ち上がったときに私も生まれたてだったわけで、日本の大きな成長と一緒に乗っかっていいますか、そういうことができたというのは、やっぱり大変幸運でした。

ザ・シンフォニーホールとの歩み

——日本のピアニストの代名詞として世界を舞台に活躍されていた中で、ザ・シンフォニーホールが1982年10月14日に開館。中村さんがホールに初出演されたのが、その6日後の10月20日。チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を弾いて下さいました。

尾高忠明先生と札幌交響楽団とのステージでしたが、もの凄く新鮮で、衝撃的でした。まだ、サントリーホールが出来る前でしたから、本当にいい響きのホールが大会の真ん中にできたというのは初めてじゃないですか？演奏がしやすいだけでなく、客席で聴いていてもとてもいいんですよ。何度か私も、キーシンや何人かを客席で聴いたんですけど、「ああ、いいホールなんだなあ」とつくづく思いました。

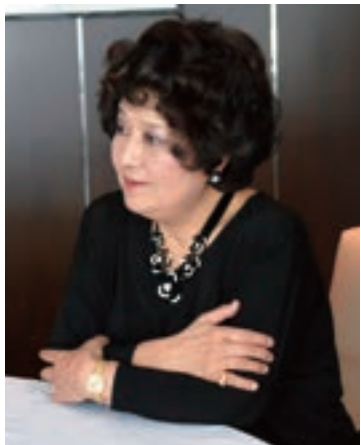
さい。」なんておっしゃって。そういうことが、もしかしたら伝統というのかな、と思っただけですね。「メフィスト・ワルツ」も、情景を音で表すという感じで、居酒屋の前に集まった楽師が調弦しているところが始まるとか、そういう面白さをおしゃべりしながら、弾いたほうが楽しいのかなと思います(笑)。

芸術とは、理解するのに成熟を必要とする分野

——55周年という区切りを迎えられて

区切りといっても、私たちは、受験前の受験生みたいなもので、演奏会が一つ終わっても、また次があつて、万年入学できないというか、卒業できないんですね(笑)。ピアノを始めたのも実質的には3歳ぐらいですから、もう60年近くになるわけで、自分をどうやってコントロールできるかは、遅ればせながらも分かっていますけど、やっぱりいくら頑張っても、筋肉を傷めたりすることが起こりますので、悪くなったらすぐ手入れます。これに尽きるんです。肉体のコンディションがいいと集中も高まりますし、やればやるほど、よくなつていきますから、今日練習しても、明日のほうが確実にいいんですね。で、明日弾くと、明後日のほうがよくなる。55年だろうが100年だろうが、去年聞いてくださった方に、「ああ、また来てよかったな」と思わせるだけの努力をしないやらないかと思っています。

芸術というのは1世紀に数人しか出ないような、非凡な才を持つ人が、心血注いで作ったもので、理解をするために



——以前、「響きよく、演奏者にとっても、音が聴きやすいホールである。まるで海の底にいるようにゆつたりと心落ち着かせて演奏に集中できるホール」と語って下さいましたが。

それは、今も変わりません。日本といわず、世界有数の素晴らしいホールだと、本当に思います。それに当時は、「ご存知のようにホテルプラザが目の前にあったので、ホテルから歩いていけるなんて、めったにない環境でしたから。ホテルが無くなって、返す返すも残念だわ(笑)。

そういえば、可笑しいこともありましたよ。私が「月光」を弾いた演奏会で、どこからコツコツ、コツコツって変な音がするんです。後でわかったのですが、私の友達があたまその側について、女の人がゆで卵をむき出して、それを3つも4つも食べたんですって(笑)。

——昔は色々なお客様が来られていたんですね(笑)。さて、ザ・シンフォニーホールでは、毎年のように出演され、リサイタルだけでなく、海外のオーケストラとの共演でも数々の名演を披露して下さいました。

は、真の成熟を必要とする分野なんです。歳と関係なく、そういうものを表現しようと思うときは、自分がその成熟に近づかなければいけない。また、芸術には、この現実の中で満たされない自分の夢をそこに託すというものがあると、思うんですね。どうせ叶わない夢なら大きく持ったほうがいいと思うんですけど、そういうスケールの大きな音楽家の若い卵たちが出てきてくれたら良いなと思っています。

デビュー55周年も通過点とし、どこか達観した雰囲気を感じながら、表現の高みへと昇り続けるピアノ界の女王、中村絃子。真の芸術道を突き進むピアニズムの軌跡に触れてみると、女王の音色"た"る由縁を感じることが出来るのではないのでしょうか？!

中村絃子 デビュー55周年記念 ピアノリサイタル

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第17番 二短調「テンペスト」 op.31-2
：ピアノソナタ 第23番 ヘ短調「熱情」 op.57

ショパン：ノクターン 第5番 嬰ハ長調 op.15-2

：幻想即興曲 嬰ハ短調 op.66

：ポロネーズ 第7番 変イ長調「幻想ポロネーズ」 op.61

リスト：ウィーンの夜会(シュペルトによるワルツ・カプリース) 第6番 S.427-6
：メフィスト・ワルツ 第1番「村の居酒屋での踊り」

2015. 1/18(日) 2:00PM A 6,000円 B 4,500円(税込)

【ご予約】ザ・シンフォニー チケットセンター 06-6453-2333

【お問い合わせ】ABCチケットインフォメーション 06-6453-6000

【主催】朝日放送